

はなみずき

(病院だより)

2015年1月

発行

山梨大学

医学部附属病院

病院の理念

一人ひとりが満足できる病院

私たちは、病院の使命を達成するため、医療を受ける人、医療に携わる人など、本院を利用する方一人ひとりが満足できる病院をつくります。

病院の目標

- ・共に考える医療
患者さんの人権を尊重し、患者さんを中心とした、共に考える人間性豊かな医療を目指します。
- ・質の高い安全な医療
特定機能病院として高度の医療を実施するとともに、医療の安全に最大限の注意を払い、患者さんのQOL(クオリティ・オブ・ライフ)が向上できる安心・安全な医療を目指します。
- ・快適な医療環境
患者さんに、最適な医療を提供できる医療環境の整備を目指します。
- ・効率のよい医療
適切な人的配置とともに、医療情報管理システムを活用し、医療の効率化を目指します。
- ・良い医療人の育成
人間の尊厳を守り、専門性を高めつつ国際性豊かな医療人を育成するため、充実した医療教育を目指します。

新年のごあいさつ

病院長 島田 眞路



あけましておめでとうございます。私が病院長を務めるのは3月末までですが、本年もどうぞよろしくお願いいたします。

昨年1年を振り返ってみますといろいろなことがありました。先ず2月14日の県内観測史上最多の積雪がありました。病院も完全に雪に閉じ込められましたが、有志の職員がいち早く除雪に奮闘してくれたおかげで翌日には救急車の乗り入れもできるようになりました。その後ボランティアで集まった職員のおかげで急場をしのぎ、藤井秀樹副病院長、佐藤弥副病院長、武田正之医学部長により災害対策本部がいち早く立ち上げられ何とか事なきを得ることができました。

私自身は東京に出張中で山梨への帰宅困難者となり、やっと18日火曜日に中央道が開通したため帰ることができました。山梨県自体が完全に陸の孤島となりましたが、その事態が3日間東京でもほとんど報道されないという異常事態でした。日頃防災対策には力を入れてきたつもりですが、この大雪は想定外、県ともども全く役に立ちませんでした。今後見直していく必要があるものと思います。

4月には懸案の峡南医療センターが開設され、旧市川三郷町立病院と旧社会保険鯉沢病院が難産の末経営統合され、新たなスタートを切りました。地域医療崩壊阻止の拠点として本院も積極的に支援していく予定です。また病院立体駐車場がオープンし、長期間皆様にご迷惑をおかけした駐車場問題が解決しました。職員の皆様には本当に長い間ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした。皆様のご協力のおかげと心より感謝しています。

6月には融合研究臨床応用推進センター(岩崎甫センター長)が完成しました。開所式も無事行われました。このセンターは山梨大学の研究の中核を担っていく組織で、今後の発展が期待されます。センターには新シミュレーションセンターが開設され、会議室も利用できるようになり病院にとっても喜ばしいことと考えております。

9月には御嶽山の噴火があり、当院のDMAT隊がすぐに結成され7名を派遣しました。DMAT隊はいつ何時でも出動いたしますが、この時は深夜に集合、準備して早朝には出発とすばやく対応してくれました。大変感謝しています。

最後に病院再整備計画ですが、新病棟は今年中に完成する予定です。実際に移動して稼働するのは今年末か来年早々と考えています。問題は旧病棟など改修予定でしたが耐震構造に不備が生じたため改修はせず、新々病棟を建設した方がよいとの結論になりました。できるだけ早く皆様とご相談したいと思っています。ご理解、ご協力のほどよろしくお願い申し上げます。

就任あいさつ

糖尿病・内分泌内科、腎臓内科 科長 北村 健一郎



昨年10月1日付で、糖尿病・内分泌内科、腎臓内科科長を拝命しました北村健一郎と申します。平成2年に東京医科歯科大学を卒業後、第二内科に入局し、以来腎臓内科学を専門として診療に従事してまいりました。平成9年から17年間、熊本大学腎臓内科に勤務し、このたび山梨大学に赴任いたしました。父方の祖父が甲府の生まれで、これも何かのご縁だと感じております。

当科は、糖尿病・内分泌疾患、腎臓病・高血圧疾患、リウマチ・膠原病と幅広い領域の疾患を対象として診療にあたっております。現代社会における食生活の欧米化と人口の高齢化を背景に生活習慣病を抱える患者は著明に増加し、成人人口の4人に1人が糖尿病またはその予備

軍、8人に1人が慢性腎臓病に罹患しているといわれております。糖尿病や腎臓病の患者さんは、多臓器にわたる合併症を容易に発症するため、ほぼすべての診療科と密接な連携のもとに全人的な医療を提供する必要があると考えております。近年、糖尿病や腎臓病に対する新しい治療薬や治療法が多く開発されておりますが、これらの疾患に対しては何といたっても生活習慣の改善による予防と定期的な健康診断の受診による病気の早期発見が重要です。

したがって当科では、糖尿病や腎臓病の発症予防及び進展阻止を目標に、院内コンサルテーション業務の充実はもちろん、かかりつけ医の先生方との円滑な病診連携を積極的に推進し、最新の治療法を提供しながら地域医療へ貢献したいと考えております。今後とも皆様方の温かいご支援、ご協力をお願い申し上げます。

保険診療に関する研修会を終えて

保険診療委員会委員長 藤井 秀樹

あけましておめでとうございます。本年は新病棟が完成し、新しい時代へと飛躍する年でもあります。よろしくようお願い申し上げます。

さて、昨年10月30日に浜松医科大学の小林利彦教授に「急性期病院における新たなリスク管理－保険診療の遵守と経営改善の両立－」と題してご講演いただきました。これは本年中に受けるであろう「特定共同指導」に関連して、職員の皆さん一丸となって取り組んで頂くためのキックオフ講演会としての位置づけでした。

ご存じのように、大学病院や地域の基幹病院、臨床研修病院を対象として各都道府県に2～3年に1回くらいの割合で、厚生労働省、地方厚生局、都道府県の三者が共同で行う個別指導を「特定共同指導」と言います。施設基準を遵守した保険診療報酬請求が行われているか、非常に厳しい指導を受け、不適切と判断されると多額の診療報酬返還をしなければならず病院経営に大きな影響を及ぼすことになります。

県内の基幹病院が診療報酬6億円を返還したことは記憶に新しいところです。本院も4つの部門からなるチームを編成し対応する予定ですが、基本は医療関係者一人ひとりが「診療報酬

が支払われる条件」を十分に理解し、特に「保険医療機関及び保険医療養担当規則」の規定を遵守し、遵守していることを必ずこまめにカルテに記載することが極めて重要です。

今後の皆様のご理解とご協力を心よりお願い申し上げます。



質疑応答に対応する小林講師（右は藤井副病院長）



研修会の様子

医療安全・質向上のための相互チェックを終えて

安全管理室（GRM） 村松 陽子

新年あけましておめでとうございます。

相互チェックは「国立大学附属病院の医療の安全と質の向上を図り、安全管理体制確立の一助となること」を目的に2年に一度実施されています。平成26年度の重点目標は、「内視鏡検査・治療及び造影剤検査・血管内治療に関する安全対策」ということで、訪問箇所は主に内視鏡室、血管造影室、CT室、MRI室においてそれぞれのチェック項目に沿って相互チェックが実施されました。

10月21日に本院関係者7名は、大阪大学医学部附属病院を訪問し、各部門のチェックを実施してきました。大阪大学附属病院は、入院病床1,078床の規模の大きな病院で、関係者は、その規模の大きさや施設の整備状況なども踏まえ、圧倒されながらも本院に活かせるエッセンスを吸収し帰ってきました。また、11月4日には、香川大学医学部附属病院からの訪問チェックを受けました。

各リスクマネージャーの方々には、院内のチェックリストの作成を、また、患者さんには訪問チェック時の質問への受け答えなどに協力

を頂きました。

何より、各関係部署の方々には、大阪大学への訪問、香川大学からの訪問に際しても、主体的な準備、協力をして頂きました。部門のチームワークと連携そのものが良い形で表現され、院内の取り組みの好評価につながりました。

相互チェックを通し、院内のチームワークの推進ならびに、より安全な検査・治療の実践に向けて前進できたことを実感しています。皆様のご協力のおかげで相互チェックを終えられたことに感謝しています。本当にありがとうございました。今後とも皆さまのご協力をよろしくお願いいたします。



訪問チェックを受けた際に行われた、アンギオ室緊急時対応シミュレーションの様子

救急救命士を対象とした妊産婦対応実習

産婦人科 助教 深澤 宏子

去る10月11日、12日に医学部キャンパスにおいて、BLSO (Basic Life Support in Obstetrics) コースを開催しました。BLSOとは文字通り、妊産婦の救命救急教育プログラムであり、救急救命士が対応を迫られることのある、自宅分娩や病院外での分娩の切迫、妊婦の出血、未受診妊婦などに対する、病院に到着する以前での対応を、座学と同時に様々なシミュレータを用いて学べるコースです。

山梨県で初となる第1回のコースは、当初、昨年2月に予定していたのですが、大雪で県内の救急救命士は全員待機、出勤となり中止せざるをえなかったため、仕切り直して予定した10月に延期しました。台風も心配されましたが、9月末に御嶽山が噴火し、山梨からも捜索隊として救急救命士の方々が次々に派遣され、数名の方が参加できなくなるという事態となりました。

それでも、当日は天候に恵まれ、屋外での救

急車内分娩対応も大変盛り上がり、無事にコースを終了できました。県内外から参加していただいた指導者、分娩介助の指導を中心的に担ってくださった助産師等の多くの方々の協力を得て、満足度の高いコースとなり大変感謝しております。

今後も定期的に関係し救急救命士の方々との連携強化を図っていきたいと考えています。



参加者による記念撮影

病院情報管理システムの更新について

医療情報室長 今井 桂

病院情報管理システムは、昭和58年の開院時から医事・検査・薬剤等の部門業務の電算化に取り組み、平成3年度からは処方・注射・検査のオーダーリングと入退院管理及び看護計画管理を導入し、15年度は、フルオーダーリング機能に加え電子カルテの機能を装備し、20年度には、統合画像管理、各部門システムの拡充、紙文書スキャニングシステム導入等により完全電子カルテ化を行い、現在に至っています。

今回は、新たに以下に掲げる内容によりシステム更新を行い、この1月から運用を開始したところです。

システムの更新にあたり、WG・マスタ作成等にご協力いただいた皆様に、この紙面をお借りして御礼を申し上げます。今後とも病院情報管理システムへのご支援・ご協力をよろしくお願いいたします。

－ 主な更新内容 －

- 電子カルテシステムのV03からV05へのレベルアップにより、カルテ1号紙表示、患者プロフィール改善、利用者ポータル機能、看護計画の変更、看護記録の変更、レジメンバック、学生カルテ等の200項目以上の機能改善の実施
- 患者配置状況・細菌検査結果・投薬内容情報等の有機的収集管理に基づく感染症管理システムの導入
- 1000台余りの電子カルテ端末の院内展開(前回より200台増)
- Web型3D画像解析システムSYNAPSE VINCENTへの変更
- 医薬品発注管理システムの導入
- 脳波計などの脳神経検査機器との接続により、電子カルテ端末から実波形や報告書が参照可能
- 災害対策強化としてバックアップ機能の強化と事業継続性強化としてネットワーク幹線の二重化を実行

病院再整備計画のお知らせ

病院経営企画室再整備企画グループ 岩村 徹

本院再整備事業の一環である新病棟建設工事の進捗状況についてお知らせいたします。

昨年5月の段階では、まだ3階部分まででしたが、その後、建設工事は順調に進み9月上旬には7階部分の床工事に入り、建物自体は、11月末に上棟を終え、並行して建物内の内装工事を実施しています。

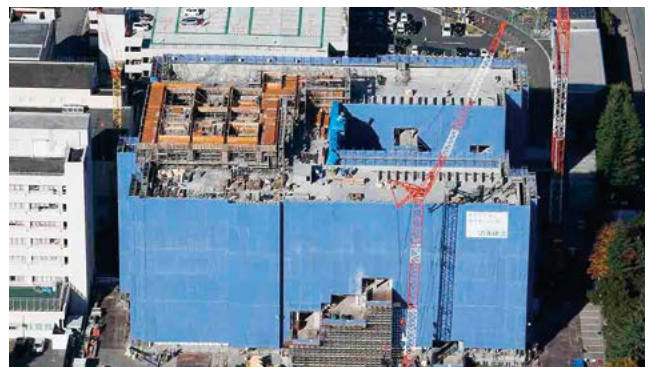
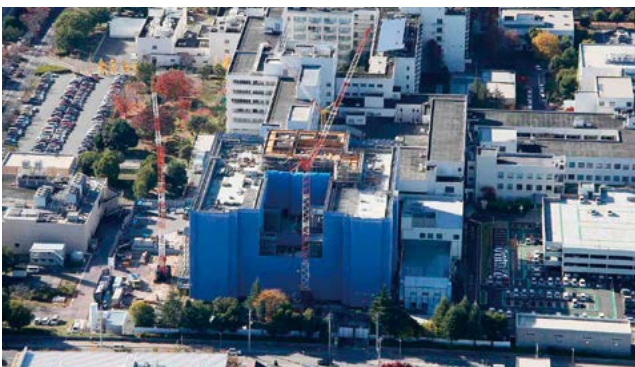
新病棟の特徴の1つに手術部門の機能強化が挙げられ、手術室の増室・拡張、高機能手術室の整備のため、既に11月より内装工事に着手しています。また、12月からは災害に強い病院機能を実現する「屋上ヘリポート」の設置工事が始まり、今年6月末の竣工に向け着々と工

事が行われています。

新病棟は、現在は青いシートで覆われていますが、今年2月より外部足場が撤去されますので、近いうちに外観を確認することができるかと思います。再整備事業期間中は、工事騒音等、ご迷惑をお掛けする機会があるかと思いますが、引き続きご協力の程、よろしくお願いいたします。

※病院再整備事業の詳細な状況は以下のURLからご覧いただけます。

<http://www.hosp-saiseibi.yamanashi.ac.jp/>



上空（左は東側、右は南側）からの撮影風景（11月27日撮影）

デング熱について

この夏に注目された感染症、デング熱について解説いたします。

デング熱は蚊が媒介するウイルス性の発熱性疾患です。デングウイルスを保有する蚊に刺されることで感染します。蚊に刺されて数日から一週間の潜伏期間の後に、感染者10人中2～5人程度の方が発症します。感染しても発症しない場合もあります。症状は、突然始まる40度近い高熱が最も多く、目の奥や頭、関節などの痛み、悪心嘔吐などの消化器症状を伴う場合もあります。

通常は発熱が始まってから一週間前後で解熱し、治癒します。まれに、解熱した後、再び発熱するなど症状がぶり返し、重症化する場合があります。そのため解熱した後も2日程度は体調の変化に注意が必要です。デング熱に関して、特別な治療薬や予防薬はありません。症状に応じ入院が必要となる場合がありますが、自宅療養が可能な場合もあります。

エボラ出血熱について

感染拡大が心配されるエボラ出血熱について解説いたします。

エボラ出血熱は約40年前にアフリカ大陸で初めて発生が報告されたウイルス感染症です。中央アフリカを流れるエボラ川の近くで発生したため、この名前が付けられました。エボラ出血熱の特徴は、患者の血液や体液を介してヒトからヒトへ感染が広がること、そして致死率が高いことです。約90%の患者に高熱が出ますが、出血は約20%の患者で認められるに過ぎず、エボラウイルス病と称されることもあります。

WHO（世界保健機構）によると、現在流行が報じられている西アフリカには伝統的な宗教儀式として死者に直接接触する文化があり、流行の一因になっているようです。また現地では水道設備や医薬品が乏しく、十分な医療を提供できない事も高い致死率の一因とされています。

今後、日本国内でも流行地からの帰国者や渡航者を中心にエボラ出血熱の患者が発見される可能性があります。しかし文化的な違いや医療環境の充実もあり日本国内でこの病気が蔓延す

デング熱はアフリカのスワヒリ語で悪魔の病気を意味する「ka-dinga pepo」を語源としているといわれています。高熱が出て、体中が痛み、時に重症化し命を奪うこの病気、傍目には悪魔に憑かれた状態と映ったのでしょうか。デング熱は赤道近辺の諸国では風土病となっており、マラリアに次ぐ規模で蔓延している熱病です。冬期に蚊の繁殖がみられない日本国内では、年を越してデング熱が流行する可能性は低いと思われる。

しかし日本では近年、海外からの帰国者を中心に年間200名近くのデング熱の症例が報告されており、来夏に再び国内での感染例が報告される可能性は否定できません。屋外の空き缶や古タイヤなどデング熱を媒介する蚊が繁殖できる環境をなくすこと、そして虫除け対策をうがいや手洗いと同様に感染症の予防として行っていくことが大切です。

る可能性は極めて低いと考えます。さらに国産の新しい抗インフルエンザ薬がエボラ出血熱にも効く可能性がある事や集中治療によりエボラ出血熱の重症患者が回復した事例などが相次いで報告されています。このようにエボラ出血熱を取り巻く状況は暗い話ばかりではありません。

流行地から帰国・入国後1か月以内に体調を崩した場合は一般医療機関を受診せず、早く適切な医療が受けられるよう、まずは自宅から最寄りの保健所へ電話で相談をしてください。また、万が一エボラ出血熱が疑われる方が直接受診された場合でも、本院では一般の患者様へ感染が拡大しないよう対策を講じておりますのでご安心ください。

手洗いやうがいをすることで感染症にかかる危険を手軽に減らすことができます。この冬は是非、皆様で行ってください。

平成 26 年度医師臨床研修マッチング結果について

臨床教育センター長 板倉 淳

臨床教育センターとして4度目のマッチングとなった本年度は、最終的に昨年度より3名増の35名(学外1名)、マッチング率は昨年度同様の70%となり、新設16大学の中ではマッチング率6位、実数7位で、42国立大学の中ではマッチング率18位、実数22位という結果となりました。

さらに山梨県全体としても3名増の61名で過去最高を更新しましたが、定員増によりマッチング率は7ポイント減の67%となりました。昨年度より卒業予定者が40名ほど増えることから、大幅な内定者増を期待された方も少なくなかったかと思いますが、わずかな増加に留まった事に関しては、全国的な大学離れも含めその要因を解析し、来年度に繋げていかなければならないと考えています。

県全体の回復につきましては、地域枠学生を活かすべく県内臨床研修病院との連携強化に努め、様々な取り組みを行ってきたことが、学生にも認め

られつつあるものと理解しておりますし、これを県内定着に繋げていく事が次の課題と考えております。

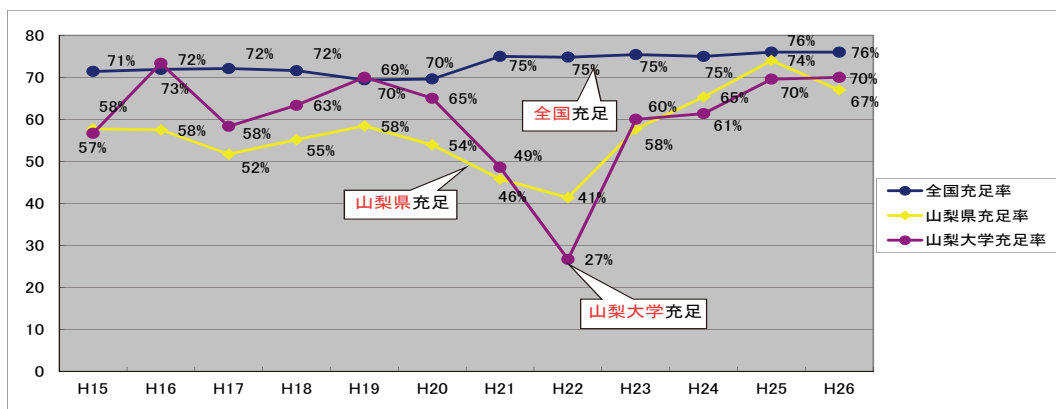
大学としての底力、県全体の将来の医療レベルの向上と充実には、初期研修終了後3年目以降の本学での専門医研修、研究医研修が重要である事は言うまでもありません。この点については、25年度は16人問題の影響で過去最低の帰学率(入局者数/卒業者数)となりましたが、26年度は転じて36名、37%と過去最高となりました。

この傾向を維持するためにも魅力ある後期研修プログラムの提供が重要であり、総合診療部の新設も含め各診療科の御努力に期待するとともに、センターとしてもさらなる支援を進めていくつもりでおります。

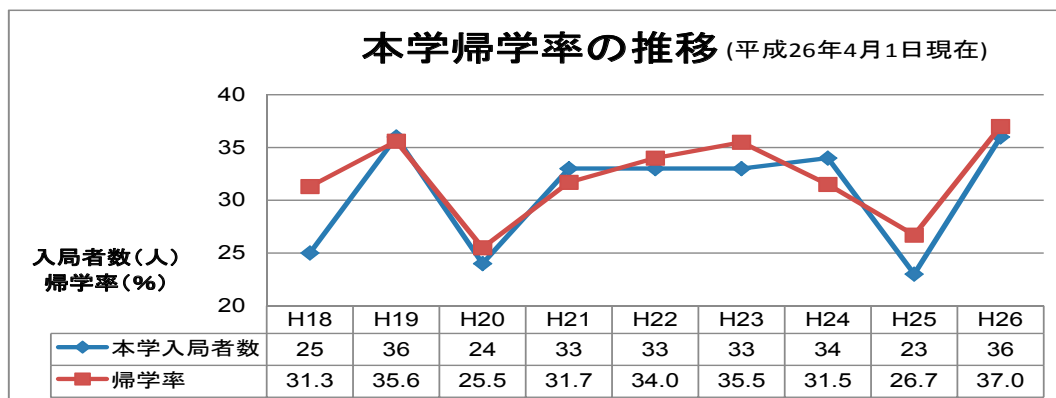
引き続き、全学をあげてのご理解、ご協力の程、よろしくお願い申し上げます。

マッチング結果の推移

		H15	H16	H17	H18	H19	H20	H21	H22	H23	H24	H25	H26
全国	全国充足率	71%	72%	72%	72%	69%	70%	75%	75%	75%	75%	76%	76%
山梨県	山梨県定員数	71	80	87	87	89	89	107	87	78	75	78	91
	山梨県内定者数	41	46	45	48	52	48	49	36	45	49	58	61
	山梨県充足率	58%	58%	52%	55%	58%	54%	46%	41%	58%	65%	74%	67%
山梨大学	山梨大学定員数	60	60	60	60	60	60	70	60	50	44	46	50
	応募者数	85	80	93	72	81	85	66	42	59	78	61	83
	山梨大学内定者数	34	44	35	38	42	39	34	16	30	27	32	35
	山梨大学充足率	57%	73%	58%	63%	70%	65%	49%	27%	60%	61%	70%	70%



本学帰学率の推移 (平成26年4月1日現在)



第51回全国国立大学病院手術部会議

手術部長 石山 忠彦

11月10日に、甲府富士屋ホテルに於いて、本学が当番大学として第51回全国国立大学病院手術部会議を開催しました。本会議を運営するための第一回幹事会は、記録的な大雪で山梨が陸の孤島となった2月17日に都内で開催されましたが、当番大学（議長）である本院関係者が欠席するという前代未聞の幕開けとなりましたが、幹事会のメンバーや関係各部署の協力のもと無事開催に至りました。

会議では、手術部運営に関するWGの検討結果の報告や、各地域ブロック会議から提案された議事に対して活発な討論が行われたほか、前日開催した看護師長研修会での検討結果の報告を、手術部の小林看護師長が発表するなど、円滑に進行・運営することができました。会議終

了後の情報交換会では、全国から来ていただいた皆様に山梨大学ワインやほうとうを味わっていただけたこともあり、実りの多い会議だったと自画自賛しています。

なお、「本学におけるダビンチ Si システム導入とロボット支援手術の現況」について大変興味深い特別講演を賜りました武田医学部長、また、大変お忙しい中ご出席いただきました島田病院長、岩下看護部長をはじめとする関係各位に対し、この場を借りて感謝申し上げます。



左から石山手術部長、島田病院長、岩下看護部長、武田医学部長

消防訓練の実施

管理課病院契約グループ 井尻 勝登

10月22日午後1時30分、2階西病棟で火災が発生したことを想定した消防訓練を甲府南消防署の協力の下に実施しました。当日は雨天ということもあり、救助袋を用いた避難訓練や避難用すべり台による避難訓練の中止、また、避難場所の変更など、予定していた訓練内容の変更を余儀なくされました。しかし、訓練に参加した教職員は、被害を最小限に留めるための行動を習得するため、皆、緊張感を持って機敏に行動しました。

閉会式後は、病棟（6階、2階）の屋内消火栓を使用した放水訓練を実施し、より多数の職員が放水を体験することにより、防火・防災に対する意識の高揚を図りました。



災害本部と放水訓練の様子



院内学級の音楽会

総務課総務グループ 土屋 豊

平成26年度院内学級音楽会が10月17日に管理棟2階中会議室で開催されました。

今年は、小学生・中学生6名で、病気と闘いながらも一生懸命練習した成果を存分に発揮し、息の合った演奏と合唱を聞かせてくれました。後半は、バイオリニストの飯田華代子先生と元気な仲間たち7名の伴奏により、【アナ雪】や花子とアンの主題歌【にじいろ】を、会場の方々と大合唱し、参加者全員が思い出深い楽しいひと時を過ごせました。



参加された子どもたち（左）と「飯田華代子先生と元気な仲間たち」による演奏

医学教育等関係業務功労者表彰の受賞

文部科学省では、医学又は歯学に関する教育、研究若しくは患者診療等の補助的業務に関し、顕著な功績のあった方々を毎年表彰しています。今年度は111名が大臣表彰され、11月20日にホテルフロラシオン青山にて表彰式が行われました。

熊谷 博司 副診療放射線技師長



私自身は表彰に値するような功績は思い当たらず、身に余る光栄と存じております。諸先生、諸先輩のご指導と職場の多くの皆様の支えに感謝申し上げます。これを機に、質の高い診断画像の提供と安全・安心の医療に、後輩の育成に、努力を惜しまず実践したいと思っております。

本学からは、本院のMRI検査における質の向上と医療安全対策及び普及に貢献された放射線部の熊谷博司副診療放射線技師長と、患者給食提供業務を遂行し、患者サービスに貢献された栄養管理部の上田幸主任調理師の2名が表彰されました。

上田 幸 主任調理師



この度の受賞は、本学の諸先生をはじめ、職員の方々のご尽力があったのことに感謝しております。また、本院給食業務に関わる調理師達全員が評価されたものと喜んでおります。今後もこの賞を糧に、より一層頑張っていきます。

VF 甲府ふれあいサッカー教室が開催されました

総務課総務グループ **土屋 豊**

11月16日に、ヴァンフォーレ甲府と山梨大学との連携による社会貢献活動の一環として、『2014ふれあいサッカー教室』が医学部グラウンドにおいて開催されました。これは、Jリー



参加者全員による記念写真

グ地域スポーツ振興活動支援事業の一環として開催するもので、今年で5回目の実施となります。今回は、発達に障害を抱えている子ども、発達のゆっくりな子どもを対象とし、秋晴れの天候と緑の眩しい芝生の上というとても気持ちの良い環境の中、70名を超えるたくさんの子ども達やそのご家族が参加しました。

ヴァンフォーレ甲府のアカデミーコーチの指導の下、県内の作業療法士や学生ボランティアも多数加わり、コミュニケーションゲームや、「子供チーム vs お父さんお母さんチーム」でミニゲームをするなど、たくさん笑顔がみられました。

クリスマスコンサートを終えて

総務課補佐 **矢澤 泉**

12月17日に病院正面玄関でクリスマスコンサートを開催しました。このコンサートは入院されている患者さん、そのご家族の方に癒しのひと時をお届けできれば、という想いから毎年開催しているものです。当日は、甲府室内合奏



甲府室内合奏団の皆さん



医学部交響楽団の皆さん



左から萩原・佐藤副看護部長、ヴァンくん、島田病院長